

17歳の戦争体験

名塚一雄 鹿沼市

私は外地には行きませんでした。主に静岡の浜松で、一九四四年8月15日からの1年間に、どんな戦争体験をしたかお話ししたいと思います。

私は、当時の宇都宮中学、いまの宇都宮高校の5年生でした。その5年生の1学期、志願兵として8月に軍隊に入隊、その後、浜松ではアメリカの飛行機に向かって銃を撃ったり、爆撃や銃撃で亡くなった屍をいくつも見るという経験をしました。そういう戦争の悲惨さと、なぜ私が16、17歳で、志願までして戦争に参加したかということ、これがどういう社会環境の中から育てられたかということ、それからまずお話ししたいと思います。

●16歳で志願兵となる

一九三一年の柳条湖事件と一九三七年の盧溝橋事件、これは満州事変と支那事変という、日本と中国の二つの戦争の発端ですが、やがてこれがさらに太平洋戦争に発展していきます。このころ小学校時代でしたが、中国との戦線で南京(なんкин)を陥落したとか、漢口(かんこう)

を陥落したという、そのたびに提灯行列をやって、みんなで町の中を練り歩いたのです。そんな中に入って歩いていくと、お菓子や飴の入った紙袋をもらえるのです。その頃はお菓子などは豊富にありませんでしたから、子供にとつて、戦争というのはこんなに楽しいものかと、まず飴で釣られました。

軍歌もありました。「露営の歌」勝ってくるぞと勇ましく、「わかが大君召されたる海の空明けて」。もつと戦争が進んでくると若い人の闘争心に訴えて、戦争の参加を呼びかける歌、「若い血潮の予科練の七つボタンは桜に錨」などという予科練の歌。戦局が怪しくなってきた昭和十七、十八年ごろになると、いま右翼の街宣車のテーマソングになっている「晝に祈る」とか、「海ゆかば」などという歌が歌われるようになってきます。

そういう環境の中で16、17歳の私たちが、「これは戦争ということに参加しなくちゃならないんだな、志願までしてでも、行かなくちゃならないんだな」というムードを作られてしまつたわけです。いつの間にか自然に、戦争という魔物に、そうした方向へ差し向けられて、「志願」という形で16歳のときに軍隊に入りました。

●初年兵、体罰の連続

8月15日に入隊して3カ月間、入ったばかりの初年兵の一般教育など一期の検閲3カ月間はまさに体罰の連続でした。私の軍隊時代の一つだけ残っている遺物が、ベルトです。帯革(たいかく)というのですが、厚さがあって、長い。1列に並ばされて一人ずつ前に出て、その帯革で頬を両方ぶたれるのです。頬には赤い筋がつく。二日に1回とか、三日に1回、物が一つなくなっても全員で飯も食わずに探させられたり、誰かが悪いことをすると集団で、班全員、そういう体罰を古参兵から受けました。

3カ月間に初年兵の教育のほか、私は航空教育隊という航空機の整備が専門で、なかでも電気関係を主にやる8中隊という部隊に配属されたのです。3カ月間に、陸軍に入った初年兵は戦闘教育が一般的でしたが、私たちは電気技術の教育が6、一般の

兵役が4ぐらいの割合でした。

「軍隊小唄」という歌の中に、「人の嫌がる軍隊に、志願で出て来るバカがおる」と言う歌詞がありますが、



軍隊時代に身に付けていた帯革(長さ1mあまり)

まさにそのバカになったわけです。今になれば笑って言えますが、そういう戦争の末期に、主に浜松でいろいろな経験をしました。

現在、おそらく自衛隊の浜松航空基地がある辺りだと思いますが、ここに84戦隊という戦闘機専門の飛行部隊があり、私はその北側隣にあった中部97部隊(第7航空教育隊)でしたが、そこには約3千人いました。第9中隊まであって、私の部門は電気でしたが、エンジン専門の機械の部隊とか、計器類を扱う中隊とか、飛行機の尾翼、あるいは主翼を調整する中隊とか、いろいろ分かれていました。

●初めての戦闘体験

それは一九四五年2月15日のことでした。前日、「遠州灘にアメリカの航空母艦が見えてくるから警戒しろ」という連絡がありました。が、よもや朝8時頃から飛行機が飛んでくるとは思いませんでしたので、皆、いつものように朝飯を食べたりしていました。私は朝早く出かけて写機(戦闘機が攻撃目標に照準を合わせるための双眼鏡のようなもの)の準備をしていました。アメリカのグラマン艦上爆撃機という航空母艦から爆弾を積んで飛び出す戦闘機が、東の方向から隣の84戦隊基地を目標にして、銃撃と爆撃を行ったのです。

上空で戦闘爆撃機が2機ずつ編隊を組み、揃って目標の隣の部隊の格納庫や兵器庫、あるいは兵舎を狙って激しい機銃掃射と爆弾を落とすとしていきました。隣の部隊であるけれど、それを見ていた私たちには、飛行機が私たちの真上から急降下してくるように見えるのです。爆弾窓がさーっと開くのが下から見え、そして急降下しながら機関銃でバリバリバリ……とやるのです。

私どもの上を通ったのは4機ぐらいだったが、そのとき私も一兵隊として、当時の九九式という、5発しか入らない小銃をこちらに向かってくる飛行機がけて夢中で1発、撃ちました。そのとき、急降下してきた飛行機の操縦士の顔が見え、ものすごい形相だった。このアメリカ兵の顔、眼光、これは今でも忘れられません。自分で銃を向けて、たった一度だけ、太平洋戦争に参戦したのです。アメリカ兵に向かって銃を向けたという初めてで、最後の経験でした。

84戦隊というのは日本の最新鋭の戦闘機部隊でした。そこに前日の14日の夕方、名古屋方面から日本のキノ84という約40機の戦闘機が降りたので、明日あたり敵が来るのかなど、予想はしていましたが、15日の朝3時頃から、40

機が全部東京方面に飛んで行ってしまった。日本側は、アメリカの航空母艦から離陸した戦闘爆撃機が、一部は京浜方面に行くだろう、という予想だったようですが、見事にはずれて浜松の84戦隊が襲われたのです。

●翌日も激しい攻撃にさらされる

そして、翌16日。明日はこちらへ来るかもしれないと、それぞれの中隊ごとにいろいろな準備はしていました。今度こそ京浜地区かと思っていたら、また次の日も浜松の第7航空教育隊という私たちの飛行基地を狙った。九七式爆撃機というのが2、3機ずつ置いてある大きな格納庫が6つありましたし、爆撃機がそれらを狙ってくるかもしれないと思っていたら、案の定、8時40分くらいに、その日は北の方からグラマン戦闘機が、やはり2機ずつ編隊を組んでやってきました。

昨日は銃を向けたけれども、次の日はあの飛行士の顔が目には焼き付いていて、とても銃を撃つ気にならなかった。それだけ子供だったのだろうと、あとで思いました。

はじめは防空壕に入っただけで見えていました。敵の飛行機が北側から2機ずつ編隊を組んで、18回降りてきました。急降下するとき爆弾窓を開いて2つ付いている爆弾を1つずつ落とすと、それ

がひゅーつと音を立てて落ちてくる、それを機関砲がバンバン、バンバン撃ち返す。1中隊から9中隊までの、それぞれの兵舎が9棟並んでいる、それに向かつていちばん北側から順に爆弾を落とす、銃を撃つたりしてきた。

私は運よくいちばん南の兵舎だったので、そこから30メートルくらい離れた防空壕に入って最後の爆撃機が落とした爆弾を、森田という男と2人で、防空壕の中から爆弾を落とすところまで見ていました。機関砲がバリバリバリツと撃つてくると、土煙が上がる。曳光実砲という、光を放つ銃弾なので、どのへんを銃撃しているかわかるので、まだこちらには来ないことの予測がついた。爆弾が落とされてから爆発する直前に防空壕の中にもぐり込む、それを何回か繰り返した。最後の36機目の飛行機が落とした爆弾が約20メートルのところに落ちて、爆弾の破裂した破片は飛んでこなかったが、私と森田が入っていた4メートルくらいの防空壕の中には土煙、砂煙、石がザザザーと落ちてきました。最後の飛行機が去って、ああ、もうこれで大丈夫かなとほっとし、早速帰ってそれぞれの格納庫から必要な備品を集めたり、人員点呼をかけて、仲間の生存を確認しました。

●爆撃、銃撃後の凄惨

兵舎に戻って、格納庫の備品とか、自分たちが使う電気関係の教材などを疎開させなくちゃならないということになり、兵舎から格納庫のほうへ歩き出しました。格納庫まで300メートルあり、途中、通路や物干し場があるんです。杉か松材の太い柱を立てて、そこへ針金を渡した洗濯物干し場です。

そこまで行くと、物干し場の針金に、仰向けになって内臓が全部出た人間の死体が4つぶら下がっていたんです。これ見たときにはさすがに怖かった。少し先に行くと、爆弾が落とされて、地面に直径が5メートルの穴があき、その中に軍服を着た兵隊が横たわっている。それからまた30メートル先には、鉄兜をかぶった人間の首が一つ、ぼーんと転がっているんです。その顔色は、砂か赤茶けた土のような色をしていました。この顔も脳裏に焼き付いていて、忘れることはできません。

そういう状況の中を格納庫まで歩いて行きました。あとで聞いたら、爆弾の破片で体中血だらけになったような人が大勢いたそうです。国内にいて、空襲の話はよく聞いたけど、銃爆撃でこんなひどい、悲惨な姿になるのかと、痛切に感じました。

●浜松大空襲

その後、6月18日に浜松市内の大空襲がありました。鹿沼でも睦町辺り、戸張町とか、一部焼夷弾攻撃を受けたということですが、浜松市内は全体が攻撃を受けた。この空襲の後、浜松市内に行ってみて、その爆撃のすごさに驚きました。

18日の午前零時から、本当に予告どおりでした。1週間ぐらい前にアメリカの戦闘機が撒いたのか知れませんが、小さいピラで予告があったようです。それを信用して疎開した人もいたけれど、一般の人は「これはスパイのしわざだから信用しなくてもいい」と疎開する気もなかったと、後で話を聞きました。

その予告どおり、18日の午前零時を過ぎると、B29の一番機が飛んできて焼夷弾を落とす。約2時間半ぐらい、かわるがわる何十機来たかよくわかりませんが、浜松市内の大半が焼け野が原になって、相当に犠牲者も出たようです。

それから4日後、たまたま浜松の陸軍病院に遺体の確認に行く用事があり、古谷という兵長といっしょに出かけました。陸軍病院の遺体安置所の裏側、ちよつとした小高い山の雑木林で人声があるので、何かと思って覗いたら、浜松空襲のときに銃弾攻撃で亡くなられたか、焼

死したかわかりませんが、何人かの遺体を重ねて柩に入れて、穴を掘って埋めている。遺体も洋服を着たままです。そしてその脇で一人、小学校1年生か、2年生くらいの女の子が呆然と立っているのです。おそらく隣組の人たちがその家族3人の遺体を処理する場所がない、火葬などできないので、そこへ3人揃えて埋めて、最後に、何々一家の墓という字を書いた角柱を立てて葬ったようです。

その脇に立っていた小さい女の子の着ていた服、下を向いて泣いていたような顔：今でも、思い出すことができます。おそらく一人ぼっちになってしまったのでしょう。浜松の大空襲で戦争のむごさを痛切に感じました。

●機銃掃射を受けた経験

私もアメリカの戦闘機の機銃掃射を何回も受けています。それは飛行場の真ん中において受けるんです。それから兵舎の中において、自分の寝てる部屋で。いちばんひどかったのは、2歳の長さに棚の上に飯ごうが並べてある。その棚がガチャガチャーンと音がしたので、見たら、飯ごうが全部吹っ飛んで、その脇に大きな穴が開いているんです。これが最初に自分でじかに受けたP51の機銃掃射でした。そのときは下で寝ていたので助かりました。

その後、自分たちの兵舎が爆撃を受けてしまったので、電子機器みたいな機材などを下の積志村という所の学校やお寺にみんな疎開させていたのです。そこへ行くため電車に乗るまで、飛行場を約2.5歳くらい歩き、さらに4歳ほど歩くわけです。そのうち、飛行場の真ん中で、相当遠くからアメリカの戦闘機P51の機銃掃射の銃弾が上を通るのです。あの中には焼夷実砲、曳光実砲、鉄鋼実砲という3種類の弾が入っている。その曳光実砲というのは火を吹いて発射されてくるので、いまどこを通っているかわかるわけです。いちばん近くを体験した時は、飛行場の端に厚い鉄筋コンクリートで作った2階建ての毒ガスの実験室が狙われたときでした。たまたま狙いが外れると、上に行かずの下へ、銃弾が走ります。これは恐ろしい経験でした。

●想像を絶する原子爆弾のすごさ

最後に、あまりにも強烈な印象で、これだけほんんとしても話しておきたいのは、原子爆弾のことです。

私は、たまたま九州の福岡から、大阪へ移動があつて、大阪へ向かう途中、8月13日の朝、広島駅に着きました。駅で約25分くらい停車したので、プラットホームから広島町を見まし

た。浜松市内の爆撃による惨状を見たばかりだったが、それ以上の広島原爆の被害の大きさ、原爆の威力を目の当たりにし、こんなに違うものかと驚愕しました。よく原爆展などで方々巡回している写真のなかに、町の中に太い木が一本あつて、その脇に石倉のようなものが一つあつて：私が見た、広島駅のプラットホームから見たのとまったく同じ光景が写っています。これはまあ、：すごい光景です。

もう原子爆弾だけは、発電所も含めて原子力は、日本の国民には残してほしくないもの一つだと思つています。原子爆弾の威力のすごさ、悲惨さを見れば、今回の原発事故を含めて痛切に反省するべきではないかと、今後の検討課題としてほしいものです。